『化鳥』

あたりを眴(みまわ)すと真暗(まっくら)で、遠くの方で、ほう、ほう、ほうッて、呼ぶのは何だろう。冴えた通る声で野末(のずえ)を押(おし)ひろげるように、鳴く、トントントントンと谺(こだま)にあたるような響きが遠くから来るように聞(きこ)える鳥の声は、梟(ふくろう)であった。

一ツでない。

二ツも三ツも。私に何を談(はな)すのだろう、私に何を話すのだろう。鳥がものをいうと慄然(ぞっ)として身の毛が弥立(よだ)った。

ほんとうにその晩ほど恐かったことはない。

蛙(かわず)の声がますます高くなる、これはまた仰山(ぎょうさん)な、何百、何(ど)うして幾千と居て鳴いてるので、幾千の蛙が一ツ一ツ眼があって、口があって、足があって、身体(からだ)があって、水ン中に居て、そして声を出すのだ。一ツ一ツ、トわなないた。寒くなった。風が少し出て、樹がゆっさり動いた。

蛙の声がますます高くなる。居ても立っても居られなくッて、そっと動き出した。身体が何うにかなってるようで、すっと立ち切れないで踞(つくば)った、裙(すそ)が足にくるまって、帯が少し弛(ゆる)んで、胸があいて、うつむいたまま天窓(あたま)がすわった。ものがぼんやり見える。

見えるのは眼だトまたふるえた。

ふるえながら、そっと、大事に、内証(ないしょう)で、手首をすくめて、自分の身体を見ようと思って、左右へ袖をひらいた時、もう、思わずキャッと叫んだ。だって私が鳥のように見えたんですもの。何んなに恐かったろう。

この時、背後(うしろ)から母様がしっかり抱いて下さらなかったら、私どうしたんだか知れません。それはおそくなったから見に来て下すったんで、泣くことさえ出来なかったのが、

「母様(おっかさん)！」といって離れまいと思って、しっかり、しっかり、しっかり襟(えり)ん処(とこ)へかじりついて仰向(あおむ)いてお顔を見た時、フット気が着いた。

何うもそうらしい、翼(はね)の生えたうつくしい人は何うも母様であるらしい。